

令和二年度 卒業式式辞（高校）

式辞

弥生三月、確かな春の息吹を感じる今日の佳き日に、國學院大學栃木学園理事長 川福基之先生のご臨席を賜り、第五十九回國學院大學栃木高等学校卒業式を挙行できますことは卒業生はもとより、教職員にとりまして大きな喜びであります。心より厚く御礼申し上げます。

四百十九名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは、「たくましく 直く 明るく さわやかに」の校訓を胸に、日常の勉学や部活動、学校行事などに全力で取り組み、日々自らを鍛え、そして成長し、本日、晴れて卒業の日を迎えました。これは、もちろん、一人ひとりの努力の結果であると思います。しかし、同時に日夜を問わず、温かい愛情を持って励まし支えて来られましたご家族や先生方、先輩・後輩、さらには地域の方々など、多くの人々のお陰でもあります。どうかそのことを思い、感謝の気持ちを忘れることなく、いっそうの精進を積み重ねることを期待します。

そして、今回出席が叶わなかったご父母の皆さまに対し、お祝いを申し上げると共に、本校の教育活動に寄せられましたご父母の皆さまの深いご理解とご支援に対しまして感謝の意を表したいと思えます。

さて、今、皆さんが飛び立とうとしている社会は、第四次産業革命とも言われる AI の急速な進化など、技術革新が目覚ましく進展・普及し、超スマート社会 Society5.0 が到来します。それに伴い人の働き方や生き方を含めた社会全体の構造までが激しく加速度的に変化しています。具体的にどのように変わっていくのか、その変化の速度や姿は誰にも予測することはできません。そのような時代を生きる皆さんにだからこそ、最後に伝えたいことが二つあります。

まず一つ目です。皆さんに、稻盛和夫氏の著書『生き方』から引用し、「利他の心」、「他のために」という話をしたことがありました。その『生き方』の中に、物事を成そうとするための心構えが書かれています。それは、物事は、まず思わなければ叶うことも叶わない。その人の心の持ち方や求めるものが、そのままその人の人生を現実形作っていくのであり、事を成そうと思ったら、まずはこうありたい、こうあるべきだと思うこと。それも誰よりも強く身が焦げるほどの熱意を持って、そうありたいと願望することが何より大切になってくるということです。すべての始まりは、強い思い。その思いは、いわば種であり、人生の庭に根を張り、幹を伸ばし、花を咲かせ、実をつけるための、最も重要な要因です。心が呼ばないものが、自分に近づいてくるはずはないという、生き方の本質を大切にしてください。

二つ目は、二学期の終業式に話したエピソードからです。本校入学希望者が参加する一日体験学習やオープンスクールの感想の中に、「駐車場の係の生徒さんたちが、よく挨拶をして、さわやかでした」「親切丁寧に誘導してくれたことに感動しました」、また、「すれ違う生徒さんが、皆さん挨拶をして下さり、本当に気持ちが良かったです」とありました。出来事は「新しい事柄や物」だけではなく、必ず人が関わり、人とつながることから始まります。人と自然に気持ちの良い挨拶ができる、人の気持ちに寄り添

うことができるといった「人とつながる心」が多くの人たちとの出会いや感動を生み出し、自らの世界を大きく広げてくれるに違いありません。そういった「國栃プライド」と言えるものをこれからも持ち続けてほしいと思います。

ところで、昨年度、皆さんが二年生の時ですが、十月に台風十九号がこの栃木市をも襲いました。豪雨による洪水のために、多くの人々が被害に遭い、本校も一週間ほどの休校を余儀なくされました。そして、まだ完全に復興とならないまでも、ようやく日常の生活が戻ってきた時のことです。今度は、新型コロナウイルスの感染拡大という危機に見舞われることとなったのです。昨年度の終わりから今年度にかけてのコロナ禍での生活、3か月に渡る休校があり、最終学年を迎えたというのに学習面、そして何よりも健康や生命に不安を感じながらの自宅待機、学校が再開しても検温、マスク、手指消毒などの感染防止策を講じつつ、神経を使いながら授業を受ける我慢の日々、学校行事も修学旅行の中止に始まり、伝統を誇ってきたあの國學院祭と呼ばれる文化祭・体育祭など様々なものが中止、また、これまで毎日苦しい練習にも耐え、必死になって努力し、集大成として臨むはずだった部活動の大会のほとんどが中止、実に多くのことが奪われていきました。さらには入学試験も共通テストの試験内容の変更などに加え、他の入学試験においてコロナ禍のために急な変更もありました。一体どれだけの試練や逆境を克服しなければいけないのかと、やりきれない気持ちになったことと思います。戸惑い、焦り、失望を何度感じてきたことでしょう。

しかし、自然災害が日本列島を襲った昨年度には、ラグビー部、野球部、柔道部を始め、多くの本校生が市内のボランティア活動に参加、また生徒会やインターアクトクラブで募金活動を推し進め、皆の心に光をあててくれました。

そして、コロナ禍の今年度、休校中に Web 教材を使用したり、先生方とインターネットでつながりながら一生懸命に勉強、登校できるようになってからは、今まで以上に熱心に早朝から放課後遅くまで自学自習をしたり、先生方に積極的に質問、また、学校行事においても多くの制限のある中で、一人ひとりが知恵を絞り、積極的にアイデアを出し合って行った文化部発表会、それは見事な出来映えであり、活気と明るさが学校に戻ってきました。また、校内競技大会も縮小したとは思えないくらいに盛り上がり、ホームルームの団結、仲間との絆を見せてくれました。皆さんはこうした逆境に負けることなく、マイナスをプラスに変えていったのです。よくぞこれほどの試練、困難を切り抜けてきました。まさに「よく頑張った」の一言に尽きます。私は改めて皆さんを心から誇りに思います。ここに参列しているすべての教職員の方々、きっと同じ思いでしょう。

振り返れば三年前、入学式の式辞の中で、私はこのようなことを述べました。「中庭に初代学校長佐々木周二先生の銅像があります。その佐々木先生は、ご自身が若くして重い病にかかり、しかも早くにご両親を亡くされ、大変なご苦勞をされました。その経験から出た先生のお言葉です。『人生は、時節や運によって左右されることもあるでしょう。必ず壁は出てきます。そのような時は、次の言葉を思い出してほしいのです。ふんばる力を持ちなさい。人間は誰でも困難を乗り越えて今日まで生きています。そして困難を乗り越えるたびに人は強くなっていきます。それはちょうど人間を強くするため

に困難があるようなものです。ふんばる力は、そういった困難を打ち砕き、克服していく原動力になるのです。』

皆さんは、日々の活動の中で培った「ふんばる力」で困難を乗り越えました。この経験が、さらに「逆境から挽回する力がある」という大きな自信を与えてくれたはずです。その自信を人生の大きな宝として下さい。

では、最後にもう一言。皆さんの高校時代に平成から令和へと年号が変わりました。令和という言葉には「春の訪れを告げる梅の花のように、明日への希望と共に一人ひとりが大きく花を咲かせられる日本でありたい」との願いが込められています。まだ今の状況はしばらく続くかもしれません。しかし、皆さんには輝ける未来があります。次の時代を生き抜く皆さんが、三年間で培った力を基に人生の大きな花を咲かせてくれることを心から願い、式辞といたします。

令和三年三月二日
國學院大學栃木高等学校
校長 青木一男